



東方甘夜録

~紅い館の甘い夜~

目次

◆紅美鈴編…雨が止むまで、好きなだけ……………	3
◆パチュリー編…動かない大図書館と秘密の実験……………	40
◆十六夜咲夜編…完璧メイドが溶けるまで……………	96
◆レミリア編…お嬢様のとろける支配……………	156
◆フランドール編…壊さないように、優しく愛してあげる……………	199

◆紅美鈴編…紅い門番の甘い夜

窓の外から聞こえる微かな雨音に、私は読んでいた本から顔を上げた。窓越しの空は墨を溶かしたような薄淡い闇に包まれている。その中をぼつりぼつりと雨が降り出していた。時計を見るともう八時を回っていた。

暖かい自室とは裏腹に、その向こう側——紅魔館の門前に立つ姿を思い浮かべると胸がざわついた。こんな時間にも関わらず、彼女はまだ勤務中なのだろうか。

外の世界から幻想郷に迷い込んで、運良くこの紅魔館に拾われてから二か月。こちらでの暮らしにも随分と慣れた。最初こそ戸惑ったこの異世界での生活だが、今では居心地よく過ごせる場所になっている。そんな生活の中で、気になる存在がいた。

……紅美鈴。紅魔館の門番としてその役目を果たす女性だ。彼女には何度助けられたことか数えきれない。常に笑顔を絶やさず、いつも朗らかに振る舞う彼女。私がこの館に來た当初も、一番親身になって世話を焼いてくれたのも彼女だった。右も左も分からない私の不安を察し、積極的に声をかけてくれたことには感謝してもしきれない。

「……暖かい紅茶でも持っていてみようかな」

ふとそんな事を思ったのは、きつと彼女のことが頭から離れなくなっていたからだろう。厨房に向かい、ティーセットを用意する。普段は妖精メイドが忙しく働いているこの場所も、夕食時を過ぎれば静かなものだった。お湯を沸かしながらマグカップを用意していると、不意に背後から声がかかった。

「あら？何をしているの？」

振り返ると咲夜さん——十六夜咲夜が銀色の髪を揺らしながらこちらを見ていた。いつも冷静沈着で完璧なメイド……彼女の前に立つといつも緊張感が走る。

「いえ、ちょっと美鈴さんに紅茶でもと思って……今日は冷えそうなので」

正直に答えると、彼女は一瞬驚いたように目を見開くと、すぐ小さく微笑んだ。
「美鈴に？　ふうん？」

どこか含みがある様子に少しどぎまぎしてしまう。が、咲夜さんは何も言わずにそのまま流れるような動きで棚から茶葉を取り出した。

「これを使うと良いわ。美鈴が最近気に入ってる銘柄よ」
「ありがとうございます！」

礼を言うと咲夜さんはどこか意味ありげな笑みを残して去っていった。

再び一人になった厨房で、早速咲夜さんから貰った茶葉で紅茶を淹れ始める。心地よい香りと共に、湯気の立つ二つのマグカップ。これを渡せば彼女は喜んでくれるだろうか。あるいは、大袈裟だと苦笑されるのかもしれない。どちらにせよ、彼女に会えるという事実には足取りが軽くなった。

傘を差して館の扉を開けると、肌寒い空気が一気に頬を撫でる。予想していた以上の冷たい風が吹いていた。小雨というよりも、霧雨に近い細かい水滴がパラパラと降り注ぎ、石畳をしつとりと濡らして光らせている。

逸る気持ちと共に足を急がせる。こんな寒い中で彼女は一人で職務を全うしている。自分の鼓動が少しずつ早くなるのを感じた。やがて門の近くに差し掛かると小さな灯りが揺れているのが見えた。恐らくランタンの灯りだろう。

——いた。

薄暗い中でもはっきりと分かる。傘を差して少し俯き加減に立っている彼女。その周囲だけが淡く光っているようで、そこに吸い寄せられるように歩み寄った。そして……。

「美鈴さん！」

遠くから声をかけると、ぱっと顔を上げた彼女と視線が交錯した。その表情は、一瞬だけ驚きを見せたあと、すぐに柔らかな微笑みに変わる。

「どうしたんですか？ こんな時間に」

「いえ、ちょっと……その、気になって。良かったらどうぞ」

美鈴さんが心配で……なんてストレートに言うのも憚られて、誤魔化すようにマグカップを差し出す。白い湯気の立つそれに右手を伸ばしながら、彼女は表情を綻ばせた。

「わあっ！ 紅茶……嬉しいです」

マグカップを受け取る際に、彼女の指先が手に触れる。そのひやりとした感触に思わず息を呑んだ。よくよく観察すれば、彼女の指は小刻みに震えている。無理もない、この寒さなんだ。慌てて自分の来ている上着を脱いで、彼女の肩にかけようとしたが「だめですよ」という言葉と共に笑顔で制される。

「あなたの方が冷えちゃいますからね、それに……このくらい慣れっここですから」

そう言って屈託のない笑顔を向けてくれる。……心の中で何かが解けていくような気がした。そうだ。この笑顔にいつも助けられてるんだ。

二人で並んで傘を差しながら、雨空の下でマグカップの中の熱い紅茶をすすると、二人で白い息を吐きだす。なんとも言えない穏やかな時間が流れる。

「ふう……あったかいなあ……」

隣から漏れた安堵の吐息。特に会話らしい会話はない。ただ傍にある静寂を共有するだけの時間。それでも苦ではなく、むしろ心地良い感覚さえ抱いている自分に気付く。美鈴さんも同じ気持ちなのかは分からないけど、少なくとも嫌がっている様子はない。ちらっと横目で見てみると、柔らかな表情でマグカップの水面を眺めていた。そして……こちらの視線に気付いたのか、またふわりと微笑み返してくれる。この時間が永遠に続けばいいのに。そう願ってしまう自分がいた。そんな気持ちに火が燻って、なんでもいいから会話をしたくなる。

「あの……本当にいつもありがとうございます。色々と面倒を見てくれて」

改めて礼を述べると、彼女は困ったように笑って首を振った。

「ええ！ 別にお礼を言われるような事はしてませんって。……ここでの生活は楽しいですか？」

「もちろんです！ 毎日充実しています。でも一番は……」

言いかけて言葉に詰まった。勢いで一番は美鈴さんの存在だと口走りそうになったが、流石に口に出す前にブレーキがかかった。すると、先の言葉を推測したのかしてないのか、彼女は微笑みを深めたまま小さく呟いた。

「私もあなたが来てくれて良かったと思ってるんですよ」

その言葉に心臓が跳ね上がる。まさか同じ気持ちを抱いてくれているとは思わず、頭の中が真っ白になった。反射的に顔を見返すと、美鈴さんは照れくさそうに頬を染めていた。

「あっ、違うんです！ そういう意味じゃなくてですね！ いや、違わないんですけど……って何言ってるんだろう私！」

自分で言ったことに慌てている様子が可愛らしくて、つい笑みが零れてしまう。それが彼女を更に動揺させたらしく、「もうっ！」と怒った風にしてみせる。

そんなやり取りをしているうちに、さっきまでの緊張感は消えて和やかな雰囲気になることができた。いくつかの他愛のない話を重なっているうちに、お互いの距離感も自然に近づいてくるのを感じた。これなら勇気を出してもっと踏み込んでも大丈夫かもしれない……そう考え始めたころ。

——ぽたり、と鼻先に落ちてきた雫で我に返る。雨足が強まってきていた。霧雨程度だと思っていた雨は、いつの間にやら結構な降り方になっている。

「あらら、本格的になっちゃいましたね」

困ったように天を仰ぐ美鈴さん。そして心配そうな眼差しを向けてきた。

「そろそろ館に戻った方がいいんじゃないですか？ このままだと風邪を引いてしまいそうですし」

優しい提案なのに、素直に従う気になれずに返答に詰まってしまふ。本当はもつと一緒にいたかった。でも、そんな事を言うのも迷惑だろうし……。

躊躇していると、彼女は傘を持ち直し、そつと肩を寄せてくれた。

「それじゃあ……少しだけ」

「え？」

「少しだけ、雨宿りしましょうか。そこに丁度良い場所がありますから」



言われるがままに彼女に連れられてやってきたのは、館の庭の一角にある古い小屋だった。鍵を開けて中に入るや否や、美鈴さんはランプに火をつけた。オレンジ色の光が部屋全体を包み込む。外見は古い小屋だと思ったが、中は意外と清潔感がある。木製のテーブルセットや椅子、簡素なベッドもあり、部屋の中央には薪ストーブも据えられている。ここで生活することも全然出来るような空間だった。

「すごい、秘密の隠れ家みたいですね」

興奮気味に言うと、彼女も嬉しそうに頷いた。

「でしよう？ 門番用の休憩所なんですよ。たまーにここでサボっちゃったりしてたり……内緒ですけど」

彼女は慣れた様子で薪ストーブの準備を始める。小さな炎が燃え上がるとともに室内がじんわりと暖まり始める。それにつれて、身体の芯から凍えていた自分たちの体温も徐々に戻ってくるようだった。

「どうぞ座ってください」

促されて椅子に腰かけると同時にホッと息が出た。長い間立ちっぱなしだった脚から力が抜ける感覚。すると美鈴さんがこちらに毛布を差し出してくれた。

「部屋が暖まるまではもう少しかかりますから、寒かったら使ってくださいね」
「ありがとうございます」

有り難く毛布を広げると、ふわりと花のような香りが漂うのに気づく。きつと彼女の匂いなんだろう。それに気付いた途端、妙に意識してしまった。なんだかいけないことをしているような錯覚を覚える。

意識しているのはこちらだけのようで、彼女は自分の分の毛布を持ってくると隣に座ってきた。

「ふふっ……ちょっと狭いですけど」

そう言いながらも肩同士が触れ合うほどの距離に接近してくる。密着した部分から彼女の体温が伝わってきてしまい、ますます緊張してくる。気まづくなつて視線を落とした先には、彼女の華奢な指先があった。綺麗に整えられた爪に、すらりと伸びた指。健康的な肌色をしていても魅力的に感じた。
……無意識のうちにその手に触れてしまう。

「ひゃっ」

小さな悲鳴と共に彼女の手が引っ込められてしまう。

「ご、ごめんなさい……つい」

「いえ……大丈夫ですけど……ちょっとびっくりしました」

少しの沈黙。雨が小屋の屋根を叩く音だけが響いている。そんな中で、彼女が顔を上げてまっすぐこちらを見つめてきた。

「でも、あなたの手、温かったです」

そう言うのとそっとこちらに手を差し出してきた。どうして良いのか分からずに困惑していると、彼女は何故か顔を赤らめながらも決然とした表情を作った。

「……いいですよ？」

「え？」

聞き返すと、更に勇気を振り絞るかのように言った。

「今……ここなら……誰も来ませんから」

どくと心臓が大きく跳ね上がった。憧れだった彼女がこんな積極的な発言をするなんて信じられない。夢じゃないかと思ってしまうほどだ。

半ば夢現の中で、理性より本能が勝って……気付けば彼女の掌に自分の掌を重ねていた。細くて柔らかくて……確かな温もり。

「あ……」

小さく溢れた溜息には驚きだけではなくて高揚感も混じっていたように思う。そのままそっと彼女の手を握る。すると彼女もゆっくりと握り返してくれた。ぎゅっ

と軽く手を握りあっているだけに、全身の血流が早まるくらいにドキドキする。この手を離してしまったら、もう二度とチャンスはないかもしれない。薄っすらとそんな恐怖感すら覚えた。

「ねえ、さっき……何を言いかけたんですか？」

「え？」

不意打ちのように投げかけられた質問に戸惑った。

「ここでの生活が楽しい一番の理由……教えてほしいです」

先ほど門の前でした会話。不意に掘り起こされて動揺してしまう。真剣な眼差しに射抜かれてしまつて言葉が出ない。彼女はもしかしたら全てを見透かしているのではないだろうか。その上で……こちらからの言葉を待っているんじゃないだろうか。だったら……正直になるしかない。

「ここでの生活が一番楽しい理由は……」

喉まで出かけた台詞を飲み込んでしまう。羞恥心が邪魔をする。けど、ここで逃げたら一生後悔することになるかもしれない。だから……深呼吸をして……覚悟を決めた。

「美鈴さん、あなたがいるからです」

思い切って告げた瞬間、室内の温度が一気に上昇した気がした。同時にものすごい開放感もあった。今まで胸に秘めていたものを解放出来たという喜び。一方で美鈴さんはいくとうと呆氣に取り残されている風だったが、次第にその表情は明るい笑顔に変化していく。

「そっか……そっかあ……」

何度も噛み締めるように繰り返した後、再びこちらを見つめた。今度は……少し潤んでいる瞳で。

「嬉しいなあ……だって、私も……同じ気持ちですから」

消え入りそうな声で呟いて俯く姿があまりにも愛おしくて、思わず引き寄せたくなった。我慢せずに名前を呼ぶ。

「美鈴さん」

彼女は返事をする代わりに顔を上げて、ゆっくりと目を閉じた。その意図するところは、もう確認するまでもない。許しを得たかのようにそっと唇を重ねる。初めて触れた彼女の唇はしっとりとしていて、柔らかくて、そして甘かった。まるで、紅茶に砂糖を入れすぎたみたいに甘美な感覚。

「ん……」

吐息と共に漏れる声はあまりにも艶やかすぎて頭がクラクラした。離すのが惜しいと思うほど心地よいキスだった。名残惜しく唇を離すと、彼女はとろけた面持ちになっている。上気した頬、半開きになったままの口元、焦点の定まっていない視線……何もかもが官能的でたまらないものがあった。普段の明朗快活な姿からは想像出来ない表情に欲情してしまいそうだ。

「キス……しちゃいましたねえ」

「……はい」

頷くことしか出来ない自分が少し情けなく感じるけども、それ以上に憧れの彼女とのキスの余韻で頭がぼーっとしていた。すると美鈴さんの方からぎゅっと抱きしめられた。細い腕だが、しっかりと背中と背中を回された手は力強い。本能に従うようにこちらからも彼女の身体を強く抱きしめた。

「ふふっ……ドキドキしてますね」

耳元で囁かれる声色が蠱惑的に響いて眩暈がするほどの陶醉感に襲われる。

心臓の高鳴りが相手にも丸分かりな状態だと思うと恥ずかしさが倍增する。同時に、腕の中から伝わる彼女の身体の柔らかさに否応にも興奮も高まる。この後はどうしようかと思案していると、耳元で美鈴さんが少し震える声で囁いた。

「あの……もし、あなたが望むなら……もっと……いいですよ？」

こちらが興奮しているのを感じ取ったのか、彼女は大胆にその言葉を放つ。勇気を振り絞ってのことだろう。興奮よりも愛おしさが湧き上がってくる。もちろん、同時に欲望も刺激されてしまうのが男の悲しいところなのだが……。

「いいのかな……こんな……」

言葉に詰まる私に対して、彼女は首筋へ顔を埋めるようにして甘く囁く。

「雨が止むまで……この場所は私たちだけのものですよ？」

その言葉が決定打となった。

二人で静かにベッドに移動する。美鈴さんがランプの火にふっと息を吹きかけると小屋の中の灯りはストーブの仄かな橙色の光だけになる。屋根を打つ雨音だけが規則正しいリズムで流れ続ける。肌寒さを覚えて毛布を被ると、すぐ隣に美鈴さんが潜り込んでくる。互いの体温が混ざり合いながら……ゆっくりと距離を縮めていく。

彼女の細い指が伸びてきて、頬をそっと撫でてくれた。

「緊張……しますねえ」

「……正直、かなり」

素直に認めると彼女はくすつと笑った。そして毛布の中でぎゅうつと抱きしめてくれる。

「私も……すごく緊張してますけど……でも、嬉しいんです」

相変わらず少し震えた声でそう告げる彼女に、胸がぎゅつと締め付けられる。こんなにも健気な想いを向けてもらって、応えないわけにはいかなかった。

「ありがとう……美鈴さん」

「ふふっ、呼び捨てで構いませんよ？」

「……美鈴」

呼び慣れない名前を口に出すと、彼女は頬を染めながら幸せそうに目を細めた。それがあまりにも愛おしくて、たまらずまた口づけを求める。彼女も迷うことなく応じてくれた。

「ん……っふ……ちゅっ……」

柔らかな感触と、合間に漏れる彼女の吐息が興奮を煽る。ただただ唇を押し付けるだけのキスが、どうしてこんなにも気持ちいいのだろう。次第に深くなる口づけの中で、どうしても我慢が出来なくなりそつと舌先で彼女の唇をなぞった。驚いたようにビクリと震える彼女だったけど拒む素振りはなく、意を決したように恐る恐る唇を開けて舌を伸ばしてくる。それが嬉しくて思わず舌と舌を合わせた途端、脳が痺れるほどの快感が襲ってきた。

熱い。とろけるほどに。

「んっ……ちゅ……れろ……んう……」

お互いに夢中になって貪るような激しいキス。ぬめりを帯びた粘膜が触れ合うたびに電流が走るようだ。あまりにも気持ちよくて歯止めが利かない。互いの吐息すらも奪い合うように激しく求めあう。気付けば美鈴の身体を強く抱きしめていた。

彼女もまた必死になって縋りついてくる。互いの身体を密着させながら粘膜を絡める感覚はとてつもなく背徳的だ。

やがてどちらからともなく顔を離すと、透明な糸が橋のように架かってぷつりと切れた。

「はあ……これ……すごいですね」

「うん……正直ヤバイね」

二人して初めての体験に翻弄されていた。ストリーブの仄かな灯りだけの室内はほとんど暗闇なのだが、目の前の美鈴が顔を真っ赤にとろかせているのだけは分かる。普段は可愛らしい印象の彼女が、大人の表情を見せているという事実に異常なほど興奮してしまう。

「ね……もつと……触れていいですか？」

少し躊躇うような素振りのあと、意を決したように顔を上げて訊ねられる。この状況で首を横に振るような男などいないだろう。頷き返すと同時に、美鈴は恐る恐る指を這わせてきた。

彼女の指が鎖骨をなぞり、そのままシャツの中へと侵入して胸板を撫でてくる。指先の動きに合わせて肌が粟立つ。キスで興奮しきった体にはこんな刺激に対しても敏感に反応してしまう。